研究課題	デジタルテキストを批判的に読解する力を高める授業の開発
副題	～総合的な学習と教科の学習をつなぐ横断的な資質，能力の育成を目指して～
キーワード	デジタルテキスト・批判的読解力・教科学習・総合的な学習の時間
学校/団体名	お茶の水女子大学附属中学校
所在地	〒１１２-００１２　東京都文京区大塚２-１-１
ホームページ	https://www.fz.ocha.ac.jp/ft/

１．研究の背景

本校は「自主研究」（総合）という探究的な学習のカリキュラムがある。この「自主研究」や教科の調べ学習で、ウェブなどで手頃に入手できる情報に安易に飛びつく傾向が見られる。一方、今年から一人一台端末の活用がスタートする見通しであるが、ますますウェブに触れる機会が増え、上記の傾向に拍車がかかる可能性がある。

そこで、一人一台端末環境での「自主研究」や教科の学習で、ウェブなどの情報の信頼性を的確に評価し、活用する能力として「批判的読解力」に焦点を当てて、その資質・能力を高めていくことのできる学習支援を検討することとした。

２．研究の目的

学習者が一人一台の端末を活用しながら様々なメディアや学習形態を取り上げ、メディアの特性や目的に応じた読解方略やツールの活用を自覚的，批判的に行う力を高めることのできる授業を開発する

３．研究の経過

前期は新型コロナ禍によりほとんど授業が展開できなかったが、その中で、ちょうどこの新型コロナ禍で噴出したデマをとりあげ、本研究の柱である批判的な読解力を高める「デマを捕まえろ」という国語科の授業を行った。

後期は多面的、批判的に様々な情報を捉える力を高めるために、学年の総合的な学習の時間を活用して「クラス対抗ディベート大会」の取り組みを進めた。「デマを捕まえろ」の学習では元新聞記者を、「クラス対抗ディベート大会」では弁護士をゲストティーチャーに招き、信頼性の高い情報を掴むためのポイントや、より説得力のある根拠を探すための視点などについて実際的に学ぶことができた。

４．第１実践

①単元名　デマを捕まえろ！

②授業の概要

様々なメディア（新聞・テレビ・インターネット）等の特性を理解し、情報を吟味するすべを学ぶ。そのために、実際にコロナ禍で噴出したデマやフェイクニュース、ミスリードなどの事例

を調べ、メディアからの情報をどのように受け止め、対処していけばよいか指針を得る。

③授業の目標
〇メディアの特性を理解し、情報を吟味するための視点を得ることができる。（知・技【情報の扱い方】中３イ）
〇メディアとの付き合い方について情報収集、整理しながら適切な情報を得て、考察することができる。（思・判・表【読むこと】中２イ）
〇メディアとの付き合い方について、学習内容を生かして今後の指針を得ようとすることができる。（学びに向かう力）

④授業の流れ
１時間目　池上彰「メディアと上手に付き合うために」通読
- 教材分を読み、ドキュメントに感想を書き込む
- 「メディア」について知る。
- 内容確認小テスト（グーグルフォーム）を行う

一人一台端末環境を活かし、フォームを使って文章の理解度を確認した。フォームでは自動採点するが、模範解答は示さないように設定した。生徒は全問正解するまで何度もチャレンジしていた。教師は間違いの多い解答の傾向を掴み、次の授業に反映させていった。

２時間目　メディアごとの特性を考える
- 次のメディアごとに分析する。（テレビ・新聞・インターネット・口コミ）

授業では、自らの経験をもとにしながら、教科書やネッで調べる形で取り組んだ。記事の写しレベルではなく、自分なりの知見をできるだけこのマトリックスに反映できるようにアドバイスをした。しかし、日頃から新聞や SNS、ネットニュースなどに触れる機会が少ない生

「メディアの特性」マトリックスの例

	新聞	テレビニュース	ネットニュース	SNS（ツイッター）
速報性	一日一回（二回）なので、情報は決められた時間にしか届かないため、速報性は最も悪い。臨時ニュースの場合は「号外」が配られることもある。	新聞よりは情報のスピードは早いが、ニュースの時間など決められた時間帯にしか伝えられないことが多い。（臨時ニュース以外）	２４時間更新している唯一のメディア。記者が書いたら即座に発信できる。ライブ動画などもある。最もスピードは早い。	速報性はかなり早い。気になったらすぐにつぶやく。
詳細さ	言葉が中心だけど、より詳しく分析した記事や意見（社説）などを掲載することがある。	言葉以外の内容も映像で具体的に伝えることができる。	詳しい情報や、ざっくりした情報などさまざまある。映像なども送信できる。	一言しかつぶやけないので、情報は断片的。
信頼性	新聞社の多くの人が関わっているので。誤報はめったにないはず。ただし、『編集」が加わるため、情報が適切に伝わらない可能性もある。	テレビ局の多くの人が関わっているので。誤報はめったにないはず。ただし『編集」が加わるため、情報が適切に伝わらない可能性もある。	悪意を持った人が虚偽の情報を流すこともある。誰が書いているわかからない場合も多い。	その情報に詳しい人なら正確な情報が得られるが、デマや嘘の書き込みも多い。
保管	紙が劣化しない限り保存することが可能。後で見返すのがかんたん。	録画していないとそのまま流れていってしまう。録画・再生するためにはレコーダーが必要で、面倒。	ネットの場合、いつの間にか削除されたり、書き換えられていることも多い。保存する場合はスクリーンショットなどをすることが必要。	あっという間に流れていってしまうため、保管は難しい。（スクリーンショット）

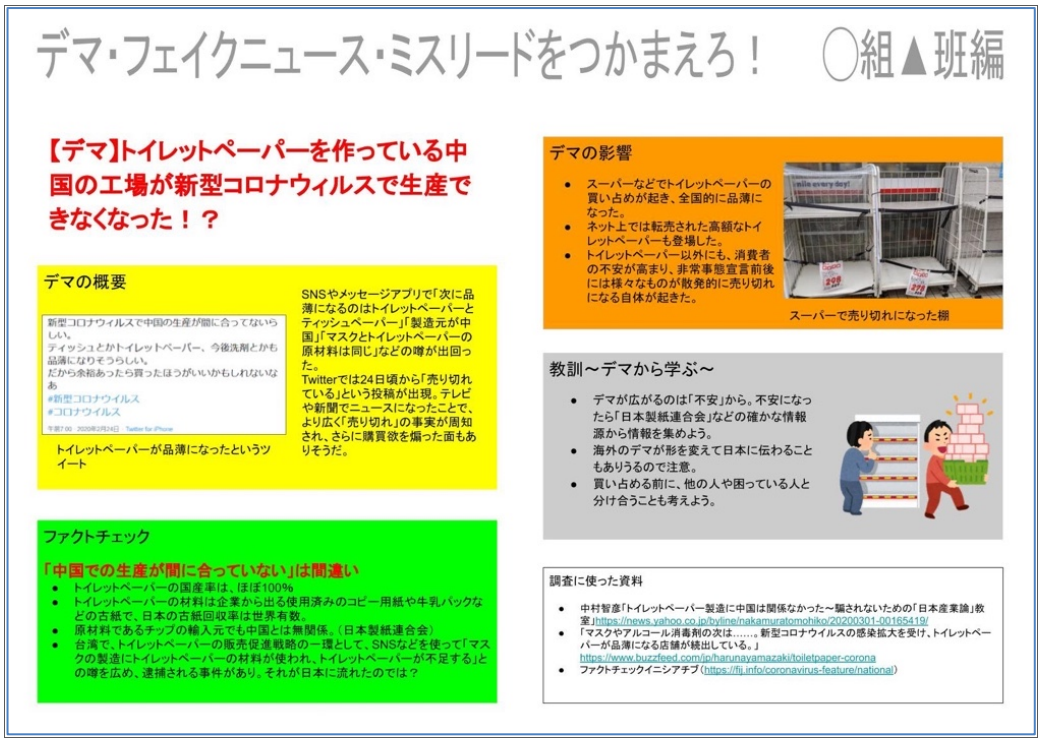
徒もいたため、媒体のイメージが持てない生徒もいた。

３～５時間目　　デマ・フェイクニュース・ミスリードについて分析する

- 内容確認小テスト（本番）
- 社会に大きな影響を与えたデマなどについて、４人グループに分かれて分析する。

　デマの概要／ファクトチェック／どんな影響を与えたか／④デマからの教訓

まず、Jamboard でグループで協力してデマを探し、付箋に貼り付けた。その後、グループで取り上げたいデマを一つ選び、分析してスライドにまとめた。



６時間目　デマに惑わされないために

- 「メディアとの付き合い方三ヶ条」を考える

これまでの学習を活かし、メディアを適切に捉え、活用するための方策である「メディアとの付き合い方三ケ条」を考え、さらに文章で説明をした。

生徒の考えた「メディアとのつきあい方三ヶ条」例

- 情報を鵜呑みにしない
- メディアの特性を理解する
- 信頼できる情報源のものを使う
- 常にメディアによって印象操作されていることを疑う
- 間違った情報を拡散させない
- 人を傷つけるような発信はしない
- 自分の頭で考える

７時間目　ゲストティーチャーによる特別授業

- ゲストティーチャーの「メディアと上手に付き合うために」三ヶ条
- 生徒が書いた三か条の講評

ゲストティーチャーとして、玉川大学の中西茂先生をオンラインでつないだリモート授業を行った。

中西先生は元新聞記者である。新聞記者の視点から、デマやフェイクニュース、ミスリードに惑わされないためのコツや心構えについて語っていただいた。また、中学生が考えた「メディアと上手に付き合うために　三ケ条」についても講評を述べていただいた。

中西先生が考えた「メディアとの付き合い方三ヶ条」

１　情報を鵜呑みにしない　２ 情報源・発信源を確かめる　３　複数のメディアで比較する

※その他、中西先生の授業でのポイント「

- 「情報を鵜呑みにしない」で終わりにせず、そこからどう行動するかが大切。
- 「いつ発信したか」は重要。それが曖昧な情報は当てにならない。
- メディアは媒体だから、事実をそのまま伝えるものではない。
- 発信には必ず編集が伴う。印象操作、情報操作との境界線はわかりにくいが、同じではない。情報を分かり易く伝えるために演出することはある。
- 新聞社では、ネットで調べたものは必ず裏取りする
- 発信には責任が伴う。誤報を流したり、情報操作をしたりということは、メディア（新聞社）にとって、あってはならないものという認識。

中西先生の話を聞いた後の生徒の感想から

- 編集と印象操作は違うということ。
- 演出のつもりでやっていても、それが視聴者に伝わらないと印象操作になってしまう。
- 情報を発信する側の目線で考えることができた。
- 発信する情報は必ずしも事実とは限らない。
- メディアの情報を鵜呑みにしてはいけないけど、全てを疑うのは違う。自分で調べたり、受け取る側として客観的に見るのが大切だ。

⑤授業から見えてきたこと

ゲストティーチャーの講演により発信者側の意図や思いを掴むことができた。

プロから情報の吟味の仕方や発信の方法を教えてもらう新鮮な経験ができた。生徒は「編集＝印象操作＝悪」と考えがちであるが、あらゆる発信には編集が含まれていること、メディアの情報は事実をありのままに伝えられるものでないことへと認識が深まっていった。

５．第２実践

①単元名　クラス対抗ディベート大会（総合的な学習の時間）

②授業の概要

一つのテーマについて多面的、多角的に捉えることと、根拠となる情報を幅広く集め、それらを批判的に捉える力を高めるためにディベートに取り組むこととした。ディベートは３～４人で一チームとし、４つのテーマで肯定・否定に別れて討論し合う。ただし、肯定側になるか否定側になるかは直前（前日）になるまで知らされないので、生徒はどちらの立場になっても相手よりもより説得力のある議論が展開できるように準備しておくことが必要となる。

なお本授業では、各クラスにゲストティーチャーとして弁護士をお招きした。弁護士はディベート大会で各クラスの「参謀役」として関わり、クラスの代表チームを勝利に導くために、テーマを深掘りする法解釈や、根拠となる情報の妥当性を高めるための方法、相手の根拠の曖昧さを反論する方法、聴衆に説得力を持って自分たちの主張を伝える方法などについて、実践的なアドバイスを受けることとした。なお、この授業には弁護士９名が参画された。

左写真：各クラスでレクチャーする弁護士

右写真：ディベート大会の講評をする弁護士

③授業の目標

- 社会の事象を多面的、多角的に深く捉え、社会に対する視野を広げる。
- 情報を的確に集め、批判的に吟味する情報活用能力を育成する。
- 討論を通して相手の主張を的確に聞き、自らの主張を分かりやすく伝えるスキルを養う。

④授業の流れ

１時間目：チーム発表・テーマ（論題）決め・アイデア出し

２～４時間目：論題に関する根拠となる情報を集め、意見をまとめる。

５時間目：練習試合（グループ内でマイクロディベート対決）

６～８時間目：クラス内予選

９時間目：クラス内決勝（弁護士の先生が参観）

１０時間目：弁護士の先生による、クラス対抗ディベート大会に向けた作戦会議

１１～１２時間目：クラス対抗ディベート大会（弁護士の先生による講評）

生徒が取り上げたディベートの論題

- 日本はネット上でフェイクニュース発信や拡散、放置することに対して規制すべきである。是か非か。（ここでいうフェイクニュースとは、虚偽の事実について、虚偽であることを分からない形で不特定多数をあざむく意図をもって作成された情報をいう。）
- 日本の中学校は、夏休みの１／２程度を高齢者の介護体験に取り組むことを義務化させるべし。是か非か。（ただし、夏休みの課題は期間に応じて調整するものとする）
- 日本は、国政選挙（衆議院議員選挙，参議院議員選挙）を棄権した場合、罰金５万円を課すべきである。是か非か。
- 日本は、コンビニの２４時間営業を朝７時～夜１１時までの営業時間に規制すべし。是か非か。

⑤授業から見えてきたこと

ディベートというゲーム性の高い学習活動であったために、生徒は相手よりもより説得力のある根拠、データを探し出そうとグループで協力して調べる姿が見られた。また、ディベート大会の活動プロセスに沿って、弁護士の先生が各クラスに指導に入ることで、情報の集め方や相手の情報を批判的に捉えるための方法などについて実践的に学ぶことができた。

ディベートの取り組みを通して、フェイクニュースや高齢化の問題、投票率の低下や働き方改革の論点について様々な角度から情報を集め、批判的に吟味する姿勢を養うことができた。

６．研究の成果

「批判的に読解する」という力を鍛えるために、「デマ・フェイクニュース・ミスリードを詳しく分析すること」と、社会の様々なテーマについて多面的に捉えるためのディベート大会にとりくむことの二つの実践に取り組んだ。どちらの授業も一人で考えをまとめるだけでなく、チームで協力して調べたり、討論をして考えを深めたりするなどの活動を取り入れることで、活発に意見交流をして、意欲的に学習に取り組むことができた。また、社会の第一線で活躍されている元新聞記者の大学教授や弁護士の先生を教室に招くことで「批判的に読解する」ことが世の中でどのように活用されているのかを学習活動の流れに沿って体験的に学ぶことができた。

７．今後の課題・展望

今回の研究では、国語科と総合的な学習の時間での取り組みが中心となった。さまざまな教科で「批判的読解力」をとりあげ、関連付けるという点ではさらに実践を重ねていく必要がある。

８．おわりに

本実践研究をすすめるにあたり、ゲストティーチャーとして協力してくださった玉川大学教授中西茂先生、第二東京弁護士会の弁護士の先生方に厚く感謝申し上げます。